

# 国 語

## 1 全般的事項

問1 国語科で育成すべき能力や態度はどのようなものか。

新学習指導要領国語科の目標において、次のとおり示されている。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

この目標は、小学校、中学校の目標を受けた高等学校国語の全体の目標であり、また、共通必修科目である国語総合の目標と同一である。これが各選択科目の目標に個別化され、それぞれの科目の指導を行うことになる。

目標の中に示された能力や態度等とその内容、留意点等は次のとおりである。

能力・態度等	内 容	留意点等
適切に表現する能力	目的や内容にふさわしい語句を選び、しかも、目的や場にふさわしい表現をする能力。	これらの能力の育成は、国語科の最も基本的な目標であり、伝え合う力を高める基盤となる。
的確に理解する能力	表現の仕方、表現された内容や事柄を、目的や場にに応じて間違いなく理解する能力。	
伝え合う力	人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり的確に理解したりして、円滑に相互伝達、相互理解を進めていく能力。	この力を高めることを通して、一人一人が良好な人間関係づくりや健全な社会づくりに積極的にかかわろうとする意欲や態度を育成する。
思考力	言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える能力。	思考力を伸ばすとは、問題を解決しようとする創造的かつ論理的な思考力を身に付けることである。
想像力	物事を心に思い浮かべたり、推し量ったり、予測したりする能力。根拠に基づき先を見通すなど、論理的な側面を含む。	想像力を伸ばすとは、将来の状況やあるべき姿を予測したり、見通しをもって行動したりすることの能力までを含めて身に付けることである。
言語感覚	目的や場に応じた言葉の適切さや美しさについての感覚。	言語感覚を磨くとは、言語活動における表現と理解との具体的な場面を通して、この感覚を洗練し、表現の効果について吟味し、適切な判断ができるようにすることである。
言語文化に対する関心	我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活の中で使用することで形成されてきた文化的な言語生活、さらには、上代から現代までの各時代にわたって、表現、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などへの関心。	小・中学校における指導を踏まえ、言語文化に対して広くかつ深い関心をもつことが高等学校における目標となる。
国語を尊重してその向上を図る態度	国語を尊重し愛護することだけでなく、その長所を伸ばし、不十分なところがあれば改善していこうという態度。	個人として国語を運用する能力などを向上する側面と、このことを基に、社会の一員として国語の向上に取り組むという側面との二面がある。

国語科の目標の中に示されたこれらの能力や態度等は、相互に有機的に関連し合うものであり、そうした関連に留意して効果的な指導を行うことが大切である。

問2 国語科の教育課程編成に当たって配慮すべきことはどのようなことか。

教育課程編成に当たっては、原則として、共通必修科目である「国語総合」を履修した後に選択科目を履修させるものとしていることに留意して、共通必修科目の履修学年や選択科目の履修順序、履修学年などについて、学校の実態や生徒の特性等を踏まえた十分な検討を行うことが必要である。

その際、選択科目相互の履修順序は示されていないが、各選択科目は「国語総合」の「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の3領域1事項のそれぞれについて、各科目の性格や特性に応じて深化、発展を図る形で配置されていることに留意する必要がある。

また、選択科目で、「A」を付した科目（以下「A科目」という。）は、言語文化の理解を中心的なねらいとし、「B」を付した科目（以下「B科目」という。）は、読む能力の育成を中心的なねらいとしている。したがって、従前の「Ⅰ」と「Ⅱ」のように、「Ⅱ」を付した科目は「Ⅰ」を付した科目を深化、発展させたものという関係ではないことに注意する必要がある。

各学校においては、例えば、A科目又はB科目のいずれか一方を中心に開設したり、A科目で言語文化や読書への関心・意欲をもたせるようにし、B科目で読む能力を高めたりするなど、学校や生徒の実態に応じた多様な履修が考えられる。

なお、今回の改訂で総則に示されているとおり、「国語総合」の指導に当たっては、義務教育段階での学習内容の定着が不十分であることにより、「国語総合」の内容が理解できないということのないよう、義務教育段階での学習内容の定着を図るための学習機会を適宜設けたり、「国語総合」の標準単位数を増加して十分な指導時間を確保したり、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした学校設定科目を置いたりして、高等学校段階の学習に円滑に移行できるようにすることが重要である。

問3 国語科において言語活動の充実を図る上での留意点はどのようなことか。

(1) 各教科・科目等との関連における留意点

各教科・科目等において、知識及び技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われるものであり、これらの学習の基盤となるのは、言語に関する能力である。したがって、今回の改訂においては、言語に関する能力の育成を重視し、各教科・科目等において言語活動を充実することとしている。

国語科は、言語に関する能力を育成する中核的な教科として、多様な言語活動を行う能力の基礎を育成する役割を担っており、各教科・科目等においては、国語科で育成した能力を基本に言語活動を充実していくことになる。そこで、国語科の指導にお

いては、各教科・科目等における言語活動の充実に資するという視点を常にもつ必要があり、特に、高等学校国語においては、課題探究的な内容をもつ指導事項や言語活動例で、このことを強く意識することが大切である。

そこで、国語科の指導と、各教科・科目等の指導とを適切に連携させ、言語に関する能力を確実に育成するため、国語科の指導と評価の計画の中に、他の教科等の指導との関連を明確に位置付ける必要がある。

国語科と各教科・科目等における言語活動について、次に主な共通点と相違点を整理する。

〔主な共通点〕

- ・言語活動を通して指導事項を指導する。
- ・言語活動は、各教科・科目等の目標の実現、内容の習得を図るための手立てであるとともに、生徒の主体的な学習を促す手立てである。

〔主な相違点〕

- ・国語の学習活動はほとんどが言語活動だが、各教科・科目等はそうではない。
- ・国語は言語活動を通して言語能力を身に付けることがねらいであるが、各教科・科目等はそうではない。
- ・各教科・科目等には、各教科・科目等に特有の表現、用語がある。

言語活動の充実に当たっては、すべてを国語科で背負うものではないこと、また、国語科以外の各教科・科目等で国語の授業をするのではないことに改めて留意する必要がある。

(2) 国語科の授業における留意点

ア 言語活動を通して指導事項を指導する

言語活動は、指導事項を指導するために行う学習活動である。したがって、どのような力を身に付けさせるために行うのか、十分意識して取り入れることが重要であり、生徒に対しても、なぜその言語活動をしているのかを認識させることが大切である。そのためには、単元の指導と評価の計画の中に、目標や指導事項との関連において、取り入れる言語活動を位置付けることが大切である。

なお、評価は目標に基づいて行われるものであることから、言語活動は、評価の対象として必ずしも記録に残さなくてよいことに留意する必要がある。

イ 言語活動は既習事項である

指導事項は、生徒全員に対して意図的・計画的に指導し、評価するものであり、言語活動は、既に学習していることというのが前提である。学習指導要領に示された言語活動例も、中学校までも含めて、それまでに指導されているものである。ただし、取り上げる言語活動が既習の事項であっても、生徒全員が習得しているとは限らないので、言語活動の様子を見て、十分に習得できていない生徒に対しては、個に応じて指導し、適宜評価する必要がある。

ウ 言語活動には創意工夫が求められる

学習指導要領の各科目に記載されている言語活動は、例として示されたものであり、これらの活動をすべて行わなければならないものではなく、それ以外の言語活動を取り上げることも考えられる。

例えば、生徒各自による活動からグループでの活動へと展開したり、座席の隣同士をペアにして短い時間で活動させたりするなど、指導者の創意により、指導方法や学習形態に工夫を凝らすことも、学習意欲を高める上で大切である。

## 2 国語総合

問1 「国語総合」の指導上の留意点はどのようなことか。

「国語総合」は、小学校及び中学校国語と密接に関連し、その内容を発展させ、総合的な言語能力を育成する科目として、選択科目や他の教科・科目等の学習の基本、とりわけ言語活動の充実に資する国語の能力、社会人として生活するために必要な国語の能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。

総合的な言語能力を育成するためには、例えば、話したり書いたりする表現活動を近代以降の文章や古典を読むことと関連させて行ったり、課題についてそれぞれの考えをまとめ、その成果を発表したりするなど、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの多様な言語活動を、相互に密接な関連を図りながら実践していくことが大切である。

また、話すこと・聞くことを主とする指導には15～25単位時間程度、書くことを主とする指導には30～40単位時間程度を配当するよう目安が示されており、必要な授業時数を確保し、計画的な指導が行われるよう配慮することが重要である。

さらに、古典を教材とした授業時数と近代以降の文章を教材とした授業時数との割合については、おおむね同等とすることが目安とされており、また、古典における古文と漢文の割合については、どちらか一方に偏らないよう配慮することとなっていることから、取扱い方に深淺が生じないよう配慮し、全体としてバランスよく指導する必要がある。

## 3 国語表現

問1 「国語表現」の指導上の留意点はどのようなことか。

「国語表現」は、現行の「国語表現Ⅰ」「国語表現Ⅱ」の内容を再構成したものであり、小学校、中学校及び「国語総合」と一貫して求めている「伝え合う力」を一層確かなものとして、社会人としての生活に生かすことのできる国語の能力を更に高めることをねらいとしている。

「国語表現」の指導においては、「国語総合」と異なり、生徒の実態等に応じて、話すこと・聞くこと又は書くことの指導のいずれかに重点を置くことができる。そのいずれに重点を置いた指導を行うかは、生徒の実態等を踏まえ、学習の必要性や効果などの観点から判断する必要がある。ただし、その場合も、あくまでも「重点を置いて」の指

導であり、いずれか一方のみの指導に終わることがないように留意する必要がある。

話すことや書くことの指導に当たっては、効果的に表現するという視点から、目的や場に応じて、言葉遣いや文体などを工夫するとともに、発声や発音の仕方、話す速度、文章の形式なども工夫することが必要である。ただし、発声の仕方や話す速度について、専門的な指導に陥ったり、文章の細かな形式にこだわり過ぎて、生徒の自由な発想や表現、創造の意欲を損なったりすることがないように留意する必要がある。

また、表現することの基盤を一層確かなものにするためには、国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などについての理解を深めることが重要であり、指導に当たっては、文や文章、語句、語彙及び文語の表現法なども必要に応じて関連的に扱うとともに、現代社会における多様な表現活動やコミュニケーション活動を踏まえて、言語生活の在り方や言語表現の役割について幅広く考えさせることが大切である。

#### 4 現代文 A 及び現代文 B

問1 「現代文 A」と「現代文 B」のねらいや特徴は、どのようなものか。

「現代文 A」は、「国語総合」の学習を踏まえ、近代以降の様々な文章、とりわけまとまりのあるものを読んで、我が国の言語文化に対する理解を深めること、生涯にわたって読書に親しむ態度を育てることなどをねらいとしている。

一方、「現代文 B」は、現行の「現代文」を改善したものであり、「国語総合」の学習を踏まえ、近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めること、思考力や想像力、認識力を伸ばし感性や情緒を育み、進んで読書して国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てることをねらいとしている。

次に、「現代文 A」と「現代文 B」の目標や指導事項、内容の取扱いについて比較する。なお、下線部は特徴的な相違点である。

	現代文 A (2単位)	現代文 B (4単位)
目 標	近代以降の様々な文章を読むことによって、 ・我が国の言語文化に対する理解を深める。 ・生涯にわたって読書に親しみ、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。	・近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高める。 ・ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。
指 導 事 項	・文章に表れたものの見方、感じ方、考え方を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。 ・文章特有の表現を味わったり、語句の用いられ方について理解を深めたりすること。 ・文章を読んで、言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。 ・近代以降の言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、言語文化について理解を深めること。	・文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価すること。 ・文章を読んで、書き手の意図や人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと。 ・文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。 ・目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。 ・語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てること。

内容の取扱い(抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> <li>教材は、特定の文章や作品、文種や形態などについて、<u>まとまりのあるもの</u>を中心として適切に取り上げること。</li> <li>教材は、近代以降の様々な種類の文章とすること。また、必要に応じて実用的な文章、翻訳の文章、近代以降の文語文及び演劇や映画の作品などを用いることができること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>近代以降の文章や文学の変遷について、必要に応じて扱うようにすること。</li> <li>教材は、近代以降の様々な種類の文章とすること。その際、現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を含めるものとする。また、必要に応じて翻訳の文章や近代以降の文語文などを用いることができること。</li> </ul>
------------	--	---

## 5 古典A及び古典B

問1 「古典A」と「古典B」のねらいや特徴は、どのようなものか。

「古典A」は、現行の「古典講読」の内容を改善したものであり、「国語総合」の学習を踏まえ、古典などを読んで、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することをねらいとしている。

一方、「古典B」は、現行の「古典」の内容を改善したものであり、「国語総合」の学習を踏まえ、古典を読む能力を養うとともに、思考力を伸ばし、感性や情緒を育み、古典を通して人生を豊かにする態度を育成することをねらいとしている。

次に、「古典A」と「古典B」の目標や指導事項、内容の取扱いについて比較する。なお、下線部は特徴的な相違点である。

	古典A（2単位）	古典B（4単位）
目標	古典としての古文と漢文、 <u>古典に関連する文章</u> を読むことによって、 <ul style="list-style-type: none"> <li>我が国の伝統と文化に対する理解を深める。</li> <li>生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>古典としての古文と漢文を<u>読む能力</u>を養う。</li> <li>ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。</li> </ul>
指導事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。</li> <li>古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。</li> <li>古典などを読んで、<u>言語文化の特質</u>や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。</li> <li>伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、<u>我が国の伝統と文化について理解を深めること。</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>古典に用いられている<u>語句の意味、用法及び文の構造</u>を理解すること。</li> <li>古典を読んで、<u>内容を構成や展開に即して的確にとらえること。</u></li> <li>古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。</li> <li>古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。</li> <li>古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。</li> </ul>
内容の取扱い(抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> <li>古文と漢文の<u>両方又はいずれか一方</u>を取り上げることができる。</li> <li>教材は、特定の文章や作品、文種や形態などについて、<u>まとまりのあるもの</u>を中心として適切に取り上げること。</li> <li>教材には、<u>古典に関連する近代以降の文章</u>を含めること。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>古文及び漢文の<u>両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする。</u></li> <li><u>文語文法の指導</u>は読むことの学習に即して行い、必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする。</li> <li>教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文種や形態、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。</li> <li>教材には、<u>日本漢文を含めること</u>。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論などを用いることができること。</li> </ul>